実践日 2015/07/06

The Futaka Spirit

（現教だより第12号）

６年　国語科
単元名「読み取ろう，人物像　考えよう，『目指す友人像』」

指導者　加地　美智子　先生

読みの目的を明確にした国語科学習の具体について提案して頂きました。難しい課題であったにも関わらず黙々と活動に取り組む子どもの姿から，これまでの積み上げを感じました。

【子どもの活動】

1　本時の学習課題を確認し，活動方法を確認する。

2　サイドラインの記入を通して人物の関係や心情を読み取る。

3　全体交流を行い，サイドラインを引いた場所を確認する。

4　ペアで交流しながら作品の主題について考える。

5　話し合ったことをもとに全体交流を行う。

6　本時における自分の見方・考え方の変容を振り返る。

作品の山場に着目することを共通理解

サイドラインの記入の仕方を確認

集中して，黙々と作業を続けていく

ラインを引いた意図を友達に説明

作品の主題について考える

学びの振り返り

（文責　橘　慎二郎）

【加地先生コメント】

加地実践【第6学年 国語科】
～ 読み取ろう，人物像　考えよう，「目指す友人像」～

本実践の主張点

Ⅰ　自分にとって意味のある学びを積み重ねるために，自分づくりの課題と文章の読み取りを関連付けた単元を構想する。
Ⅱ　子ども自身が自分の読み取りを自己評価し，友達を学び合うために，単元を貫く言語活動っを共有するものさしとして活用する。

読みの目的を明確にした国語科学習について

本提案は，教科学習においての「生き方・在り方の深化」を目指すための提案である。教材文を読む際，単に登場人物の心情や場面の移り変わりなど，内容の読み取りに終始するのではなく，「なりたい自分の姿」を想定しながら読むことで感動が得られ，自分にとって意味のある知が創造されやすくなるとの主張である。これについて，以下の点について考察したい。

〇教科学習の意義について

本校の国語科では，その本質を「言葉の面白さやよさ，美しい響きを感じ取り，言葉を実生活の人と人との関わりの中で生かし，楽しもうとすること」と置いている。教材文を読むにあたって，優れた叙述や表現の裏側に隠された作者の意図に心を動かされたり，それらの表現を日常生活での人との関わりに生かしたりしていくことについては国語科で求めていくべき内容であり，教科として扱うことに疑問の余地はない。しかしながら今回のように，友情や信頼をテーマにした教材文の内容と自己の内面をリンクさせながら読み取り，最終的に「自分づくり」へ向かっていくという展開は，教科学習で求めていくべきこととは言い難い。教科学習と創造活動という２領域でカリキュラムを構成している以上，教科学習と創造活動のさび分けは重要であり，最終的には「生き方・在り方の深化」を求めていくとしても，教科学習ではやはり教科の本質に立ち返り，その教科ならではの見方・考え方を育むことをねらいとすべきではないだろうか。本提案では，関連する内容として，運動会の振り返りを新聞にしたり，自己の内面をダイヤモンドチャートにしたりしているが，これらについても創造活動とのさび分けは不明瞭である。

また，今回の提案が，国語科の他の単元についても適用できるものかどうかという点についても疑問が残る。今回扱った作品の内容が「友達とは何か」という問いについて考えさせるものであり，これが現在の子どもの実態に合ったものとなっていたため今回のような展開が可能であったともいえる。全ての単元とは言わないが，全く内容の異なる他の物語文や説明文などについても同様の提案が可能でなければ，新たに求めていくべき国語科の在り方の提案とはなり得ないのではないだろうか。これからの国語科で求めていきたいのは単なる内容理解ではなく，国語科の本質的な問題解決を通して単元ごとに育まれる見方・考え方の獲得である。読みの目的を「なりたい自分の姿への近付き」とするのではなく，国語科本来の問題解決を通した見方・考え方の獲得と置くことで，子どもは他の単元においても新しい眼鏡で物事を捉え直すようになり，結果として生き方・在り方の深化につながるのではないだろうか。

本校が目指す子ども中心主義

本提案は，教科学習と創造活動という２領域カリキュラムの関連を明らかにするための，チャレンジングな提案であった。しかしそれゆえに，やや内容が複雑になり，どうしても説明の時間が長くなってしまった感を受けた。また，ペア学習においては子ども同士の活発な意見交流がなされ，子どもの課題意識の高さや国語科での育ちを感じたが，自然発生的な交流や子どものつぶやきはあまり見られず，全体交流の場面では教師との一問一答が多かった。授業づくりを行う際に大切にしたいのは，本校が長年大切にしてきた「子ども中心主義」の考え方である。教師が学びの主導権を握り，予定通りに流していく授業ではなく，時には子どもにとって切実な問題が表出され，それに沿って授業の展開が変わっていくような，そんな授業も面白い。そのような子どもの姿こそが，２領域カリキュラムで子どもを育てることのよさを伝えるための大きなきっかけになるのではないだろうか。

各教科，領域においてそれぞれアプローチの仕方は異なるが，本校の教育理念に共感し，県外各地から足を運んでくださる先生方に思いが正しく伝わるよう，提案と子どもの姿で語れるよう，これからも学びを深めていきたい。

成果と課題

〇　「生き方・在り方の深化」は，教科学習の内容と直結する形で想定していくのではなく，教科の本質的な問題解決を通して間接的に求めていくべきであることが，改めて確認できた。
△　各教科の本質と，これから求めたい子どもの姿，新たに向かいたい教科学習の理想について話し合い，共通認識を深めていく必要がある。